

## 【研修参加学生の報告書から】国際協力体験講座－ミャンマーコース－

・支援する側とされる側が成長し合えるような取り組みの形を目指して、日々活動されている方に直接お話を伺うことができ、とても勉強になった。国際協力とは先進国から途上国へものを与えるといった支援ではなく、技術を教える中で協力し合う、助け合いの活動だということが理解できた。また、畜産の視点から国際協力のあり方について考えるというテーマに基づき、農村はもちろん市場や屠場を見学し、ミャンマーの農業を肌で感じる事ができたのが大きな収穫であった。最終的に研修での学びを実生活の中に生かしていく、これが国際協力にもつながりえることではないかと思うようになった。日常生活の中でできること、ミャンマーだけではなく他の国にも貢献できるようなことを今後探していきたいと考える。  
(農・1年)

・私は畜産の知識がほぼゼロに近い状態で本研修への参加を決めた。しかし事前研修で日本の畜産について調べ、実際に農家や牧場に行く中で、日本における畜産の生産から販売までの工程内容を知ることができた。そしてある程度知識を持った状態でミャンマーの畜産現場に足を踏み入れることで、日本との違いやそれぞれの見習うべき点、問題点が明らかになった。少しだけ日本の技術が進歩しているおかげで、良い環境の中で暮らすことができているのだということを考えさせられた。その他にも全く分からないミャンマー語での会話の大変さを経験して、コミュニケーションの大切さも学ぶなど、海外に出てみることであらゆる事が自分にとってとてもいい刺激になった。  
(農・1年)

・はじめは国際協力とは先進国が発展途上国に対して技術を提供することだと思っていた。しかし途上国に足を踏み入れ、実際に現地の生活を体験することで、国際協力とは先進国と途上国が「支え合い、共に学ぶ」ということであった。先進国が途上国に支援してあげるのではなく、支援する中で先進国にも何か得られるものがあると謙虚な姿勢であることが大切である。以上のような新たな国際協力の概念を踏まえ、畜産という切り口からどのような国際貢献ができるのか考究した。国際協力の「共に学ぶ」という点を考えることがとても難しかった。また、国際協力です業を行う時は、対象となる村の団結力ややる気を見極めなければ事業が成立しないという現実問題も難しかった。国際協力はこんなにも多くの問題を抱えていて、どのようなプロジェクトがあるのかを考える以前に、国際協力は本当に必要なかわからなくなった。現地に行ったら答えが出ると思い込んでいた自分の国際協力に対しての甘さに気付けたのは、今回の研修で得られた大きな進歩である。  
(農・1年)

・国際協力は私にとって事前研修のときから実態をつかみにくいものだった。そして自身が思う以上に身近にすることが可能な一方で、根本にあるべき姿の理解が難しかった。しかし確かに理解できたこともある。主に話を伺った国際協力で携わる日本の方々やミャンマーの方々や対等に現状に向き合い、ミャンマーの方々や、村が自立するためにプロジェクトを行っていた。そして、それに応えるようにミャンマーの方々も参入しており、繋がりを感じた。しかし自分勝手な利益しか考えないという話、援助慣れしている民族の話など、発展の弊害についてのリアルな声も確かに聞いた。国際協力の様々な視点や考え方をたくさん聞き、そこから渡航メンバーで真の国際協力の在り方や最終目標を深く考え共有できたことが何より嬉しかった。  
(農・1年)

### ▼集合写真



### ▼現地高校生に日本の畜産についてレクチャー

